

## 21 章

### 21 章 1～9 節

- これまで、聖書の終末預言を学んできましたが、少し、整理してみたいと思います。

- (1) 主にあつて死んだ者(クリスチャン)の魂はその肉体から離れて、キリストのもとに行き、朽ちることのない肉体の復活を待ちます。
- (2) キリストの空中再臨の時に、肉体は栄光のからだに復活し、その時に生きている者たちも空中に引き上げられ、朽ちないからだに変えられます。キリストの教会はキリストの花嫁として迎えられ、教会時代は終わります。
- (3) 七年間の反キリストによる患難時代を迎えます。これは主に神の民ユダヤ人の救いのためです。
- (4) 大患難を潜り抜けたユダヤ人に恵みと哀願の霊が注がれて、悔い改めた後で、キリストはエルサレムに地上再臨され、千年王国が始まります。キリストの地上再臨と共に、花嫁である聖徒たちも共に地上に来て、千年王国を生きるようになります。また、全イスラエルの民が全地の四方から集められて、最終的な帰還が実現します。
- (5) 千年王国は旧約預言の成就です。サタンは幽閉され、キリスト(メシア)による地上統治がなされます。戦争はなくなり、普遍的な平和が訪れ、地は癒され、多くの実りを得ます。人々は主を知り、主のみ教えによって生きるようになり、旧約で預言されたメシアによる祝福を存分に味わうようになります。しかし千年王国では、古いものと、新しいものが混然としています。
- (6) 千年王国の終わりには、サタンが牢から解放され、最後の反逆を試みますが、その時がサタンの最期となります。天と地が完全に崩れ去り、あとかたもなくなったあとで、大きな白い御座の前のさばきがなされます。そのあとで、キリストはすべての支配を御父にお渡しになります。

- 以上が、これまで学んできた内容の大筋です。今回は、神の救いのご計画の最終ステージです。新しい天と新しい地が創造され、「聖なる都」「新しいエルサレム」が天から下って来て、神と人とが地上において永遠に存続します。

### 1. 私は見た—「新しい天と新しい地」を

**21:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。**



- 「私は、・・・見た」という黙示録の定型句。この定型句は 21 章に 2 回あります(1, 2 節)。この定型句は、啓示の新たな展開を示すものできわめて重要です。

#### (1) 「新しい天と新しい地」という表現について

- ヨハネが見た「新しい天と新しい地」という表現は、旧約聖書(イザヤ書 65:17、66:22)にも見られます。果たして、旧約のイザヤはヨハネが見た「新しい天と新しい地」について啓示されたのでしょうか。

- イザヤ書 65 章 17 節～

17 見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。

## ヨハネの黙示録を味わう

18 だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。

19 わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない。

20 そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。……

●イザヤ書 65 章 17～19 節までを読むと、黙示録 21 章 1 節と同じように、「新しい天と新しい地」が創造され、同時に「エルサレム」も創造されてそれを喜びとし、神がご自身の民を楽しみとするとあります。しかし、20 節からは千年王国のことが記されています。**旧約聖書の預言は基本的にはメシア的王国(千年王国)に関するもの**であり、黙示録 21 章の「新しい天と新しい地」と表現が同じであったとしても、その内容は異なっています。千年王国の祝福と永遠の御国には多分に共通したものがあります。しかし、黙示録 21 章と 22 章に記されている永遠の御国の内容は、旧約にはない、新約独自の預言が含まれています。それが「**天から下ってくる新しいエルサレム**」という創造物です。

●もし、イザヤ書の「新しい天と新しい地」の創造が、黙示録 21～22 章と同じくする啓示であったとしても、旧約では時系列の異なる内容が隣り合わせに記されていることがあります。例としては、ゼカリヤ書 9 章 9 節と 10 節の場合、9 節ではメシアの初臨が、10 節ではメシアの再臨が隣り合わせになって記されています。そのように考えるとすれば、イザヤ書 65 章 17～19 節には永遠の御国が、20～25 節には千年王国が、逆の時系列で記されているということになります。それにしても、黙示録 21 章には、旧約(イザヤ)にはない新しい啓示である「新しいエルサレム」をヨハネは見て、それを書き記していると考えられます。焦点はこの「新しいエルサレム」なのです。

●「**新しい**」というギリシア語は「カイノス」(καίνος)という形容詞が使われています。ギリシア語には「新しさ」を表す二つの用語があります。一つは、単に時間的な新しさを意味する「ネオス」(νέος)で、同じものがそれ以前にいくら存在してもさしつかえありません。しかしもう一つの「カイノス」(καίνος)は、古きものとの関連において、質的に、全く新しいという意味であり、年月を経ても、新しいことには変わりがないことを強調する語彙です。従って、「**新しい天と新しい地**」とは、古いものが変化し、刷新されて、新しくなったということではなく、全く新しく創造されたものであることを意味します。

●「**以前の天と、以前の地は過ぎ去り**」とは、黙示録 20 章 11 節にもあるように、「地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった」ことを意味します。天地創造以来、歴史が展開されてきた舞台、アダムとエバ以来、人間が生まれ死んでいった舞台、サタン(竜)とその軍勢が最後の反抗を試みた舞台、それらは、「大きな白い御座」の出現とともに御前から完全に、あとかたもなく消え去った舞台としての天と地。Ⅱペテロ 3 章 10 節にも「…その日には、天は大きな響きをたてて消え失せ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます」と預言されています。イエシュアも「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」(マタイ 24:35)と言った「天地」です。これらの天と地がすべて消え去った後で、創世記 1 章、2 章のように、神は「**新しい天と新しい地**」を創造するのです。ヨハネはそれを見たのでした。使徒ペテロも「私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」(Ⅱペテロ 3:13)と記しています。千年王国においてはメシアが正義をもってすべてのものを統治されましたが、永遠の御国においては、「正義」そのものが自分の家を建てるのです。それは、時間に

支配されない神と人との永住の家です。

## (2) 神はなぜ「天と地」にこだわるのか

●ここで、ひとつの突っ込みをしたいと思います。それは、創世記 1 章 1 節で、「初めに、神は天と地を創造した」とあります。黙示録 21 章でも「新しい天と新しい地」が、以前の天と以前の地が変わって登場します。なにゆえに、「天と地」なのでしょう。「新しい天」で神と人が永遠に住むだけではダメなのでしょう。なぜ「地」が必要なのでしょう。しかも黙示録 21 章では、聖なる都、新しいエルサレムが、わざわざ「神のみもと」である「新しい天」から出て下って来るのです。どこに下って来るのか、その下ってくる地点について、聖書は何も記していませんが、その地点は「新しい地」と考えるのが自然です。

●最初の創造にも、最終の創造にも、「天と地」がワンセットなのです。神がご自身のかたちに似せて人をお造りになり、交わりを持つとされた舞台の神秘がそこに隠されています。神と人が共に住む具体的な場としては、最初の創造では「エデンの園」でしたが、最終の創造では「**新しいエルサレム**」なのです。

## (3) 「もはや海はない」

●さらに、「新しい天と新しい地」においては「もはや海はない」とあります。なにゆえに、「海」がないことが特筆されているのでしょうか。今日の科学では「海」は「地球でいのちが初めて誕生した場所」とされていますが、聖書が意味する「海」にはそうした概念はありません。海は獣の出現の場所です。黙示録 13 章 1 節に「また、私は見た、海から一匹の獣が上ってきた」とあるように、海は神に敵対する者の巣窟です。しかし新しい世界には「海」はないのです。

●「獣」とは、サタンから権威と力を与えられて、聖徒たちを踏みじり、神を罵った反キリストのことです。つまり、聖書は、「海」を悪魔的なものとして描いています。海は、常に動揺し、人を寄せつけず、不気味で、奇怪で、危険極まりない狂暴さと死を連想させます。また、混沌と無秩序、破壊的な力の象徴でもあります。そうした「海」が「もはやない」のが、新しい天と新しい地です。現代に生きる私たちには容易に想像し得ない世界ですが、「新しい天と新しい地」についての光景は、必ずしも、聖書に明白に描写されているわけではありません。天国がどういうところか、残念ながら、聖書にはその概略しか記されていません。しかし、そこは、神と人が愛のうちに永遠に共に住む究極的な世界であることは間違いありません。

## 2. 私は見たー「聖なる都」「新しいエルサレム」が天から下って来るのを

**21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。**

### (1) 天から下ってくる「聖なる都」「新しいエルサレム」

●ヨハネは「私はまた、・・見た」と記しています。何を見たのかといえば、「**聖なる都**」、すなわち、「**新しいエルサレム**」です。それが「天から下ってくる」のをヨハネは見えています。この「天」について、A・フルクテンバウム師は「第三の天」のことだとしています。使徒パウロはこの「第三の天にまで引き上げられた」ことをコリント人への手紙第二、12 章で記しています。しかも、その「第三の天」が「パラダイス」であることを伺わせる記述をしています(Ⅱコリント 12:4)。それはコリント人への手紙(第二)が書かれる 14 年前の出来事のように、パウロの年譜から推測すると、14 年前とはパウロが回心した後、タルソに帰って生活し

ていた頃です。つまり、パウロがバルナバに見出されて、アンテオケにおいて本格的な働きをする前の頃です。そのパウロがガラテヤ書 4 章 26 節では「**上にあるエルサレム**」、ヘブル書 12 章 22 節では「**天にあるエルサレム**」と表現しています。これらはいずれも同義であると考えられます。興味深いことに、これがイエシュアの言われた「**父の家**」(ヨハネ 14:1)だとも解釈することができます。いずれにしても、信仰の父アブラハムはこれを待ち望んでいたようなのです。

「彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。」(ヘブル 11:10)

## (2) 「聖なる都」「新しいエルサレム」の構成員

- その「都」である「新しいエルサレム」が、神のみもとを出て、天から下ってくるのをヨハネは見ました。ということは、「聖なる都」である「新しいエルサレム」はすでに神によって造られて、存在していたことになります。それが新しい地に下ってくるのです。しかも、それは「花嫁のように整えられて」とあります。
- キリストの花嫁としての教会は、すでにキリストの空中再臨によって引き上げられています。ですから、黙示録 21 章にある「聖なる都、新しいエルサレム」は同じく「花嫁のように」と表現されていたとしても、「教会」とは異なります。その都には、あらゆる時代のすべての神の子らが、神にあがなわれたすべての人々がいると考えられます。古い天と地が消え去った時に、瞬時にして、最後の審判も素通りして、天の父の家に集められ、天の都を形成したと考えられます。その聖なる天の都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように美しく整えられて、神のみもとを出て、天から下ってくるのをヨハネは見たのです。そして、その光景の霊的な意味を語る声をヨハネは聞いたのです。

## 3. 私は聞いた—「御座から出る大きな声」を

**21:3** そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

### (1) 神の幕屋が人とともにある

- 御座から出る「大きな声」(黙示録には 21 回あります)は、その後述べられている啓示がきわめて重要であり、権威あるものであることを示唆しています。この声は、「**見よ。神の幕屋が人とともにある。**」と語っています。このことが聖書における神と人のかかわりの姿です。「幕屋」とは神と人が共に交わり場であり、それが歴史的展開とともに、幕屋から神殿(主の宮)となり、神殿からからだとしての教会、そしてメシア王国となり、聖なる都となっていきます。これらすべては天における本体としての「神の家」の写しなのです。神が天と地を造られた目的は、神と人とが住む場としての「家」を造るためでした。しかしそれがサタンによって妨げられたために、神は再び、新しい天と新しい地を創造されたのです。そこでは、神が人とともに住み、人は神の民となるのです。神の人に対する最高の約束は、神との永遠の親しい交わりの家に招かれることなのです。
- そこにおいては、21 章 1 節の「海がなくなる」だけでなく、以下のように、すべてのことが新しくされます。なくなるものが七つあります。

**21:4** 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜ

なら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。

●「以前のもの」とは、「ホ・プロトス」(の複数)で、「第一のもの、最初のもの」。すなわち、古い秩序の天と地を意味し、やがて、新しい秩序にとってかわられるものです。

- (1) 海がなくなる(21:1) . . . . .「サラツサ」
- (2) 死がなくなる(21:4) . . . . .「サナトス」
- (3) 悲しみ(悲痛)がなくなる(21:4) . . .「ベンソス」
- (4) 叫び声がなくなる(21:4) . . . . .「クラウゲー」
- (5) 苦しみ(痛み)がなくなる(21:4) . . .「ポノス」
- (6) のろわれるものがなくなる(22:3) .「カタセマ」
- (7) 夜がなくなる(22:5) . . . . .「ニユクス」

21:5 すると、御座に着いておられる方が言われた。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」また言われた。  
「書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」

●5 節で語っているのは、「御座に着いておられる方」です。千年王国の終わりに、メシアなるイエシュアが父なる神に国の統治権をお渡しになっています。「なぜなら、キリストの支配は、すべての敵がその足の下に置くまで、と定められているからです。」(Ⅰコリント 15:24~25)。従ってここで語っている方は、一見、父なる神であるように思われます。しかし次節の6 節を見ると分かるように、語っている方が「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。」という自己宣言をしています。これは1 章8 節で、キリストが同じ称号で紹介されていることを考えるならば、キリストも同時に御座に着いておられると考えられます。

## (2) 三つの宣言

●「御座に着いておられる方」が語っていることは、三つあります。

その**第一**が「**見よ。わたしはすべてを新しくする。**」という宣言です。このフレーズは旧約においても、新約においても常に語られてきましたが、この宣言こそ、神にしてできる宣言です。人間による変革は絶えざる改革でしかありませんが、主なる神こそ絶対的な一新をはかることのできる方です。Ⅱコリント 5 章 17 節に「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古い者は過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」という新生の事実は、究極的には、この新天新地において完全なものとなるのです。そのときの私たちのいのちの輝きはいかばかりでしょうか。

●**第二**は、「**書きしるせ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。**」という宣言です。「これらのことば」とは3 節、4 節で語られている内容です。あるいは、黙示録全体とも言えるかもしれません。そこに書かれていることは、夢物語でも、妄想でもなく、信ずべき事柄であり、真実であると宣言されています。「見ずに信じる者は幸いです。」(ヨハネ 20:29)とイエシュアは疑い深い弟子のトマスに言われましたが、「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」(ヘブル 11:6)。黙示録 22 章 6 節でも、御使いが「これらのことばは、信ずべきものであり、真実なのです。」とたたみ掛けています。



**21:6 また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。」**

●**第三は、「事は成就した。・・わたしは、渇く者には、いのちの水から、価なしに飲ませる。」**という宣言と約束です。「事は成就した」、原文は「(これらは)なった」という3人称複数の完了形で書かれています。

イエシュアが十字架上で最後に語られたことばは、「完了した」ということばでした。これはイエシュアに与えられた使命(働き)が完成されたことを示す「テレオー」という動詞(受動・完了形)が使われていますが、黙示録21章6節の「成就した」という動詞は「ゲゴナン」という「ギノマイ」の現在完了複数形が使われています。それは神が約束された数々のことば(諸々の御旨)がことごとく実現したという「**預言的完了形**」です。これから起こる事ではあるのですが、聖書では、それが確実に起こる場合に「**預言的完了形**」で表わすのが常です。つまり、「事は成就した」とは、「これらの事が起こることがすでに決定されている」というニュアンスを含んでいます。だれもそれを翻すことはできないのです。すべてのことが神から発して、神によって、神が完成させるのです。

●その証拠のひとつとして、「わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる」ということばで代表させています。この約束はイザヤ書55章1節、および、ヨハネの福音書4章13~14節で語られている招きの成就と言えます。黙示録7章17節においても、反キリストによる大患難時代において殉教した聖徒たちの群れに対して語られた約束の成就でもありますが、「いのちの水」そのものが、神ご自身を意味しています。それは尽きることのない神との親しい交わりを象徴しています。

●イザヤ 55:1 ああ。渇いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買ひ、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。

●ヨハネ 4:13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

●黙示録 7:17 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。

●このように、約束された内容は同じであっても、その語られた時点は時間的にそれぞれ遠く離れています。しかし、神の約束(真実)は、長い時間の流れを貫いて確実に実現されることが分かります。

**21:7 勝利を得る者は、これらのものを相続する。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。**

●「勝利を得る者」とは、栄光を受けるあらゆる時代の聖徒たちであり、彼らに対する祝福は、「これらのものを相続する」ことです。「これらのもの」とは、神が備えてくださっているすべてのものを意味します。神の子とされた者は、朽ちることのない、神のすべての祝福を相続するのです。

**21:8 しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもは、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。**

●そうした神の聖徒たちとは対照的に、キリストに対する不信仰のゆえに、悲しむべきものを相続する者たちもいることが付け加えられています。その相続とは、火と硫黄との燃える池の中に投げ込まれる「第二の死」です。

#### 4. 御使いは「私に見せた」－「聖なる都エルサレム」を

21:9 また、最後の七つの災害の満ちているあの七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりが来た。彼は私に話して、こう言った。「ここに来なさい。私はあなたに、小羊の妻である花嫁を見せましょう。」

●ここから話の内容が変わります。ヨハネは高い山に連れて行かれて、「小羊の妻である花嫁としての新しいエルサレム」を見せられます。「聖なる都」「新しいエルサレム」が、ここでは「小羊の妻である花嫁」と言われています。つまり、ここでは、未来における聖徒たちの永遠の住まいである「新しいエルサレム」が、美しく着飾った「花嫁」にたとえられているのです。キリストの花嫁である教会と混同してはなりません。この時点における都には、あらゆる時代の聖徒たち(大患難時代に救われた人々、千年王国時代に救われた人々、そして教会も含まれている)が、神と共に永遠に住む家として天から新しい地に降りてきたものだからです。

21:10 そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。

21:11 都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

●「聖なる都」「新しいエルサレム」の特徴は、神の栄光の輝きがあることです。その輝きは宝石に似ており、透き通った碧玉のようであったと記されています。

●話は、聖書から離れます。私たちの住んでいるこの地球の内部を見た者はだれもいません。もし、この地球を真二つに分けたとしたら、その面はまぶしく白く輝いているはずだと言われます。なぜなら、そこには高圧と高熱による熱放射といわれる光があるからです。物質は熱くなることで光を放ちます。ですから地球の内部は白く輝いているのです。もしその熱を取り除くことができれば、そこには輝く宝石でいっぱいの光景を見ることができると言います。もし私たちがそこへ行くことができるならば、宝石箱の中に暮らすようなものです。



●地球の中心部には鉄でできたコア(中核)があり、それを包む鉄が溶けた液体のような部分があり、その外側をマントルという硬い石が覆っていると言われます。そこに宝石が多くあると言われています。だれも見たことはないのですが、地球の長い歴史の中で繰り返される地殻変動によって、時折、溶岩とともに地表に出てきた中に宝石と言われるものが含まれているらしいのです。つまり、何百キロという地下深くにはそうした宝石が多く存在しているのだそうです。これは You Tube の「地球の中心"コア"への旅」からの情報ですが、私たちが未だ見たことのない世界がこの地球にも多くあるとすれば、神のもとから新しい地に降りてきた聖なる都が地下深くのマントルにある宝石で飾られていたとしても、神の視点からすれば、驚くに当たりません。つまり、言いたいことは、私たちの住んでいるこの地球であっても、知らないことが多くあるとすれば、神の世界についてはなおさらのこと、私たちの想像を越えるようなことがあっても少しもおかしくありません。ただ、重要なことは、神が語られることは「真実である」と信じるることなのです。



## 21 章 10 節～22 章 4 節 A

●黙示録 21 章と 22 章に記されている永遠の御国の内容は、旧約にはない、新約独自の預言が含まれています。それは、「天から下ってくる新しいエルサレム」という概念です。そこには御座があり、すべての時代における神の民がいるということです。

●「百聞は一見にしかず」ということばがありますが、永遠の御国は、実際に見てみなければ分からないことが多くあります。しかし、はっきりしていることは、永遠の御国は色彩豊かな、極めてカラフルな世界であるということと、「神の御顔を仰ぎ見る」世界だということです。今回の焦点は、後者の「神の御顔を仰ぎ見る」世界ですが、前者のカラフルな世界である「新しいエルサレム」の概要についても見ておきたいと思います。

### 1. 聖なる都、新しいエルサレムの概要(規模)

【新改訳改訂第 3 版】黙示録 21 章 10～21 節

10 そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。

11 都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

12 都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。

13 東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。

14 また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。

15 また、私と話していた者は都とその門とその城壁とを測る金の測りざおを持っていた。

16 都は四角で、その長さも幅も高さも同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。

17 また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四ペーキウスあった。これが御使いの尺度でもあった。

18 その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。

19 都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髄、第四は緑玉、

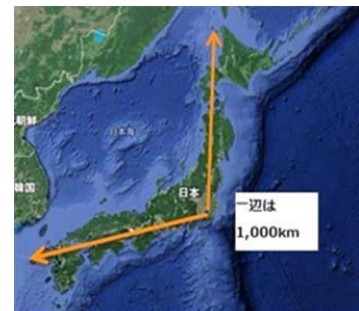
20 第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髄、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。

21 また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。



#### (1) 立方体の大きさ(規模)

●聖なる都(新しいエルサレム)は、長さも幅も高さも同じ立方体です。御使いの持っている金の測りざおによれば、一辺が一万二千スタディオン。これを現代の寸法に直すと、2,220km になります。右図は日本の中心である東京から 1,000km の距離がどのあたりかを示しています。2,220km はその倍以上です。もし、東京を中心にして半径 1,110km の円を描くならば、日





本はその円の中にすっぽりと入ってしまうほどの大きさになります。このような建造物はこの地球には存在しません。しかし、新しい天においては、それがすでに存在しているのです。ヨハネはそれを見たのです。そして、やがてそれが新しい地に降りてくるのです。

●なぜ、立方体なのでしょう。すべて意味があります。それは、聖なる都が旧約の幕屋における至聖所の部分だからです。至聖所は正方形でした。そこは神と人が唯一交わることのできる神聖な場所でした。



### (2) 都は透き通った金の壁で造られている

●18節には「その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。」とあります。御使いがその城壁を測ると(おそらく、城壁の厚さのこと)、人間の尺度で百四十四ペーキュスあった。これが御使いの尺度でもあったとあります(17節)。144ペーキュス(1ペーキュスは約45cm)は、現代の尺度では約65mです。分厚い壁です。

### (3) 12の門にはイスラエルの部族の名がそれぞれ記されている

●13節には「東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。」とあります。そしてその門には、イスラエルの12の部族の名前が記されているのです。黙示録においては、12部族の並びの配分は記されていませんが、旧約の幕屋の周辺に宿営した各部族の配置は、天の都の写しとして啓示されたと考えるなら



ば、以下のような配列となっているはず。東側の門(イッサカル族—ユダ族—ゼブルン族)、北側の門(アシェル族—ダン族—ナフタリ族)、南側の門(シメオン族—ルベン族—ガド族)、西側の門(マナセ族—エフライム族—

ベニヤミン族)。

●それぞれの門には御使いがいます。

### (4) 城壁の土台石は12の宝石で飾られている

●都の土台石は12の宝石で飾られています。東にある第一の土台石は「碧玉」、第二は「サファイヤ」、第三は「玉髓」、北の第四の土台石は「緑玉」、第五は「赤縞めのう」、第六は「赤めのう」とありますが、名前は同じであっても、色はしばしば異なることがあるようです。幕屋で仕えた大祭司の胸あて(エポデ)には12の宝石がはめ込まれています。出エジプト記28章17~21節には以下のように記されています。

17 その中に、宝石をはめ込み、宝石を四列にする。すなわち、第一列

は赤めのう、トパーズ、エメラルド。

18 第二列はトルコ玉、サファイヤ、ダイヤモンド。

19 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶、20 第四列は緑柱石、しまめのう、碧玉。これらを金のわくにはめ込まなければならない。

(上図は大祭司のエポデ)

21 この宝石はイスラエルの子らの名によるもので、彼らの名にしたがい十二個でなければならない。十二部族のために、

その印の彫り物が一つの名につき一つずつ、なければならない。」



## ヨハネの黙示録を味わう

- ちなみに、「飾られる」というギリシア語は「コスメオー」(κοσμέω)と言い、「化粧品」の語源ともなっています。
- それぞれの土台石には、「小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった」とあります。門に記されたイスラエルの12の部族の名前と土台石に記された12使徒の名前が記されていることで、旧約と新約がつながります。



### (5) 真珠で出来ている門



- 12の門はどの門も桁外れに大きい一つの真珠で造られています。その真珠の門を通して都に入ります。なぜ、門に真珠があるのでしょうか。イエシュアが語ったたとえ話の中に「真珠」が出てきます。「天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。素晴らしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」(マタイ13:45~36)。
- この真珠の門は一日中決して閉じられることはありませんが、そこを通ることのできる者は、「小羊のいのちの書に名が記されている者だけ」です(黙示21:27)。

### (6) 都の大通り

- 真珠の門をくぐると、そこに開かれてくるのは、21節にあるように「都の大通り」です。そこは透き通ったガラスのような純金の道です。「透き通った」(「ディアウゲース」 διαυγης)ということばはこの箇所にはしか使われていません。この世のものではない光景だということです。



### (7) 都の光

- 聖なる都、新しいエルサレムには神殿はありません。なぜなら、「万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからです。」(22節)。かつての聖所(幕屋、神殿)は、神と人との会見の場所として備えられていましたが、新しいエルサレムにおいては、そこに、神と人が常に共にいるので聖所は必要ないのです。
- また、11節で「都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。」とあるように、「神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかり」であるゆえに、太陽も月も必要がないのです。歴史の中で特別に現わされた神の臨在を現わす「シャハイナ・グローリー」が永遠に輝くようになるからです。また、「諸国の民が、都の光によって歩む」ようになります(24節)。

## (8) いのちの水の川

22:1 御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、

22:2 都の大通りの中央を流れていた。

●都の中には、水晶のように光っている「いのちの水の川」が流れています。創世記2章では、「一つの川」がエデンの園を潤すために流れ出ていました。ゼカリヤ書では「その日には、エルサレムから湧き水が流れ出て」(14:8)とあります。これは千年王国において成就します。預言者エゼキエルも、神殿の敷居の下から流れ出る水の流れを見えています。足首からひざに、ひざから腰に、そして、泳げるほどの川となり、その川の流れ行く所は、すべてのものが生きようになりました。それも千年王国において実現します。イエシュアは、仮庵の祭りの終わりの日に、エルサレムに集まった人々に向かって「だれでも渴いているなら、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水が流れ出るようになる。」(ヨハネ7:37,38)と言われました。その「生ける水」は、教会時代にも、また千年王国においても流れ出るようになりますが、新しいエルサレムにおいては、「神と小羊との御座」から流れ出るのです。

●ちなみに、教会の歴史の中で、聖霊は「御父」から出たのか、あるいは「御子」から出たのか、それを巡る議論で教会が東西に分離しました。やがて、ニカヤ公会議では「聖霊は、御父と御子より出で」と宣言されました。

●エゼキエルの場合も、イエシュアの場合も、「生ける水」というのは「聖霊」のことを意味しています。その聖霊なる「生ける水」は、神と小羊との御座(単数)から流れ出て、都の大通りの中央を流れるのです。聖霊が働かれるので、神と人とをつなぐすべての必要が永遠に満たされるのです。永遠のいのちを生きるためには、この生ける水が必要なのです。新しい天と新しい地には「海」はありませんが、「いのちの水の川」はあるのです。しかも、水晶のように光りながら、都の大通りの中央を流れているのです。このような形で三位一体なる神が存在しておられるのです。

## (9) いのちの木

22:2・・・川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。

●いのちの川が流れるその川の両岸には、それぞれいのちの木(単数)があり、月替わりにつける12種の実(単数)がなります。いのちの木の實と、いのちの木の葉(複数)は聖徒たちを元気づけます。「いやした」ということばから、永遠の御国でも病気があるのかと思われるかもしれませんが、それはありません。いのちの木の葉によってより神に仕える霊的な力が与えられるものと考えられます。なぜなら、新しいエルサレムには「もはや、のろわれるべきものは何もない」(22:3)からです。創世記3章以来の罪と死の力は一掃されて、失われたエデンの園の回復が完全に実現します。それは、**神が人間を創造した本来の目的が実現することになる**と言えます。

## 2. 神の御顔を仰ぎ見る

## ヨハネの黙示録を味わう

22:3・・・。神と小羊との御座が都の中であって、そのしもべたちは神に仕え、

22:4 神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。

●神が人間を創造した本来の目的とは、22章4節にある「**神の御顔を仰ぎ見る**」ということばに要約されます。罪を犯したアダムとエバは、「神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠し」(創世記3章8節)ましたが、新しいエルサレムにおいては、一切の恐れは愛によって締め出され、「神の御顔を仰ぎ見る」ようになるのです。これは、イエシュアが言われた「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです(未来形)」の完全な成就です。また使徒パウロが、「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔を合わせて見ることとなります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。」(Iコリント13章12節)と記した希望の完全な成就です。

●神の最終的な救いの目的は、「神の御顔を仰ぎ見る」ことにあります。これは旧約時代にはあり得なかったことであり、モーセでさえ神の後ろ姿を見ただけでした。「神の御顔を仰ぎ見る」ことと、3節で記されている「しもべたちは神に仕え」とがどのようにつながるのでしょうか。

### (1) 神に仕えるしもべ

●「しもべ」ということばにつまずくことがないようにしましょう。永遠の御国に行っても、「しもべ」として神に仕えることになるのかと思われる方もいるかも知れませんが、イスラエルの歴史において、「しもべ」という称号は「最高の称号」であるということを理解する必要があります。義務的な「しもべ」ではなく、自由で主体的なしもべなのです。イエシュア自身も神のしもべとしてこの世の旅路を全うされました。それゆえ、御父は御子をすべての名に勝る名を与えて高く引き上げられました。神に仕える「しもべ」とは、自由と喜びに輝く存在を表わす語彙なのです。

### (2) 神の御顔が意味すること

●永遠の御国では、神と「顔と顔を合わせ」(face to face)る永遠の交わりがあります。「顔と顔を合わせて」神と交わるということは、神の子どもとされた者の特権です。今日のあらゆる知識にもかかわらず、すべての神の子たちが、神との直接的な交わりを持つほどに神を知っているわけではありません。しかし、永遠の御国では神を目の当たりに見るのです。

●教会やシナゴグ(ユダヤ教の会堂)の礼拝の最後でしばしば繰り返されている「アロンの祝祷」があります。民数記6:24 『【主】があなたを祝福し、あなたを守られますように。

6:25 【主】が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。

6:26 【主】が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』

ここでは、「御顔」ということばが繰り返されています。この祝祷では「祝福を受ける者の上に、神が御顔を照らしてくださるよう」と祈っています。この「主が御顔をあなたに照らされますように」というフレーズはユダヤ的な表現です。この表現には「主があなたの方に振り向き、再び注意を払ってくださるよう」という意味があります。なぜ御顔なのでしょう。聖書では「顔」というイメージをどのように用いているのでしょうか。

●顔つき(顔の表情)は、私たちがどのような者であるかということに関係し、私たちの感情、ムード、性質など、



内面で起こっていることを反映します。「心に喜びがあれば顔色を良くする」(箴言 15:13)とあるように、幸せなときにはその人の顔は輝き、逆に、悪いことをしたときにはこわばった表情にもなります。カッとなって怒りを表した顔もあれば、悪巧みのない内面の無垢な心を表す優しい顔もあります。つまり、内側にあるものが顔に映し出されるのです。

●「主が御顔をあなたに向けられますように」というフレーズは、微笑みをもって「顔を上げた」ことを意味しています。これは神の友情を表わす表現です。主はいつでも、どこでも、どんなときも、微笑みをもって御顔を私たちに向けておられるのです。ただ私たちの側が自らの犯した罪のゆえに、「主の御顔を避けて」いるにすぎないのです。御顔を避けて生きてきた私たちに、神ご自身が、キリストを通して、「顔と顔を合わせた」交わりを回復してくださったのです。したがって、黙示録の22章4節にある「**神の御顔を仰ぎ見る**」とは、**神との永遠の友情の中に生きることを意味する**と言えます。

### (3) 神の御顔を仰ぎ見、慕い求めた模範者としてのダビデ

# 聖なる主の御顔を仰ぎ見つめれば　すべては輝きに包まれます

あなたをあがめます　主に生かされているから

●「彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。」(詩篇 34 篇 5 節)とあります。「神の御顔を仰ぎ見る」とき、私たちを囲むすべてのものは、主の光の中で色あせてしまいます。ダビデは、詩篇 27 篇 4 節で「私はひとつのことを主に願った。・・私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」と告白しています。「主の家に住む」とは、主を礼拝し、主を知ることによって、主と親しく交わることを意味します。その愛の交わりが私たちにいのちを与えます。ダビデはそれを意識的に、優先的に求めました。しかも、「私のいのちの日の限り」(詩篇 23:6、27:4)です。ここにいつの時代においても模範とすべきダビデの霊性があります。

●「顔と顔を合わせる」親しい交わりを通して神の栄光が輝き始めます。このことは、私たちが罪の贖いを経験した後、さらに一段高いレベルへと進む必要があることを教えています。神は私たちを、ただ罪から自由にするためだけに贖われたものではありません。神は、私たちが神との親しい交わりを持ち、顔と顔を合わせて神を知るために、キリストを通して、私たちを新しく創造してくださいました。それが完全に実現する永遠の御国に向かって、私たちは今も旅をし続けているのです。

### 終わりに

●日々の礼拝(主日の礼拝)において、常に求められていることは、**主の御顔の臨在**です。御顔を見ることが礼拝の目的です。限りなき優しさや慰めに満ちた主の御顔の麗しさ、そうした主の御顔を仰ぎ見ることが出来るなら、すべてのものが色あせたものとなります。目に見えるものに動かされることはありません。ブレることのない信仰を持って生きることができます。それゆえ、私たちは、ダビデの霊性に倣い、主の家に住むことを優先しながら、主の御顔を慕い求める者となれるよう祈りたいと思います。主によって贖われた者たち、主にあるすべての者たちの究極の存在目的は、まさにそのことにあるのですから。



【付録】

## 聖なる都、新しいエルサレム

真殿 輝子著「ヨハネの黙示録 講解」付録より

名称	聖なる都 新しいエルサレム	22:5	礼拝堂	神である主と小羊	21:22
所在地	神のみもと、御座の前	21:2	内部光源	神の栄光、小羊のあかり	21:23
所有者	父なる神	22:3	温度調節機能	太陽・月なし、夜もない	21:23 22:5
共同所有者	子なる神(キリスト)	22:3	存在価値	諸国の光、 世界の羨望的	21:24 21:26
管理人	聖霊なる神	22:2	環境と風紀	門は開いたまま	21:25
外観	神の栄光、宝石の輝き、 透明の美	21:11	会員制(資格)	いのちの書に名が記されて いる者	21:27
外壁	144 スタディオン	21:12 21:17	供給水源	フリードリンク いのちの水	22:1 21:6
玄関	真珠でできた 12 の門	21:12 21:21	特別食堂	月替わりメニュー いのちの木 12 種の実	22:2a
守衛	12 人の御使い	21:12	緊急医療看護	神癒療法 葉はいのちの木の葉	22:2b
表札	イスラエル 12 部族の名前	21:12	住民の質	のろいのない人々	22:3a 21:4
基礎土台石	小羊の 12 弟子、 12 の宝石の装飾	21:14 ~ 20	住民の職業	神と小羊とに仕え、 礼拝すること	22:3b ~ 4a
デザイン 大きさ	1 万 2 千スタディオン、 四方真立方体	21:16	住民の所属	額には神の名前がついてい る	22:4b
装飾	碧玉の城壁、 全て透明な純金	21:18	館内放送 (音楽)	四つの生き物と 24 人の長老 と御使いたちによる賛美	4~5:
廊下	透明な純金	21:21			

## 21 章 10 節～22 章 4 節 B

●前回、同じ聖書箇所から、「天から下ってくる新しいエルサレム」という概要について学びました。先週の木曜の「突っ込み聖書研究」でヨハネの黙示録 7 章を学びました。第六の封印と第七の封印の間に挿入されている間奏曲的な部分ともいうべき箇所ですが、そこには、「額に神の印を押された神のしもべたち」のことが記されています。イスラエルの各部族から 1 万 2 千人ずつ、それが 12 の部族で合わせると 14 万 4 千人です。これらの人々はやがて新しい天から新しい地に降りてくる「聖なる都エルサレム」の構成メンバーです。

●なぜ、12 部族なのか(しかしこの 7 章にはダン部族が入っていませんし、またなぜ入っていないのか説明もされていませんが・・・)。なぜ、1 万 2 千人なのか。1 万 2 千人は「12」の千倍です。その数にいったいどんな意味があるのか。「12」は「**神の永遠の完全数**」だという表現があります。しかしその表現では、なぜその数字が永遠に完全なのかを説明していません。

●その謎を解く前に、「12」にかかわる箇所を聖書からもう少し拾ってみたいと思います。

### 旧約聖書では

- (1) ヤコブの 12 人の息子たちと、そこから生じるイスラエルの 12 の部族。
- (2) 約束の地の偵察のためにそれぞれの部族から派遣された計 12 人の者たち。
- (3) 荒野の旅の途上のエリムという町で見出された 12 の泉。
- (4) 約束の地に渡って行った最初の宿営の地ギルガルに記念の石として据え置かれた 12 の石。
- (5) 大祭司が着る服の胸に着けるエポデに埋め込まれた 12 の部族を表わす宝石。
- (6) ダビデが 12 の二倍である 24 の組に分けた神殿で仕える祭司の組織。

新約聖書でも、この「12」という数は受け継がれます。

- (1) イエスが選んだ 12 人の使徒(弟子)。
- (2) イエスが 12 歳の時の出来事—巡礼先のエルサレムで両親とはぐれたことで、わたしは必ず自分の父の家にいるという真理を両親にはじめて明かされた出来事。
- (3) 黙示録では、神の御座の回りに 12 を二倍した数の長老たち。額に神の印を押されたイスラエルの 12 部族から各 1 万 2 千人(合計 14 万 4 千人)、「聖なる都」(新しいエルサレム)にある「12 の部族の名前」のみならず、「12 の門」「12 人の御使い」「12 の土台石」「12 の真珠」「12 使徒の名前」、そして「12 種の実」、さらには、1 万 2 千スタディオン、12 の 12 倍の 144 ペーキュス。

●なぜ、これほどまでに、神は「12」にこだわっているのでしょうか。人や部族や物などの「数」、あるいは「長さ」といった単位は異なっても(120 歳という年齢もありました)、12 というのは同じです。とても不思議に感じないでしょうか。感じなければそれでおしまいなのですが、こだわって突っ込んでみると、意外なことに、この数は、12 という数量ではなく、「1」という数と「2」という数の配列に秘密があるように思います。これはあくまでも私の仮説なのですが、ヘブル的視点からの真理の光を求めている者のひとりとして、意外にじっくりくるものがあるのです。今回はその秘密と、もうひとつ、黙示録 21 章 24, 26 節、22 章 2 節にある「**諸国の民**」とはいったいだれのことか、そのことについても触れてみたいと思います。

## 1. 「父」を意味するヘブル語の「アーヴ」(אב)に隠された秘密

●ルカの福音書 2 章 41 節以降にこうあります。

「さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。イエスが 12 歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り」(2:41~42)

ここでイエシュアが「12 歳になられたときも」とあります。なぜ 12 歳なのか。普通はそこに特別な意味を感じません。しかし、神の御子イエシュア(「イエス」のヘブル名)を取り巻く風景のありとあらゆることが、神のご計画と密接につながっているのです。そこに目が開かれるとき、イエシュアにある神の驚くべき救いのドラマが見えてきます。

●イエシュアが 12 歳になった時に、巡礼先のエルサレムで両親とはぐれたことで、「わたしが必ず自分の父の家にいるということをご存じなかったのですか」とはじめてイエシュアは両親に語っています。この真理が両親にはじめて明かされたのですが、両親はそのことばの意味が分からなかったと書かれています。

●「12」という数字と「父の家」とには密接な関係があるように思われます。なぜなら、聖書の記述にはたまたまという偶然性はないと信じるからです。自然界の生態系には一切の無駄がないように、神のご計画においても、同様にすべてが無駄のない密接なかかわりをもっていると信じます。それを私たちはイエシュアの両親と同様に、なかなか理解できないだけのことです。

### (1) 「父」は「子」を必要とする

●イエシュアは、なぜ神を「父」と表現したのでしょうか。母ではなく、なぜ父なのでしょう。なぜ、イエシュアは必ず自分の父の家にいると言ったのでしょうか。ここでは「神殿」を「父の家」と言っています。

●ちなみに、福音書でイエシュアが神のことを「わたしの父」という表現で語っているその数は 36 回あります。マタイでは 12 回、ルカは 3 回、ヨハネでは 21 回です(マルコにはこの表現がありません)。「天におられる父」という表現もあります。この場合、「天」と「父」ということばに対応していることばは、「地」と「子」です。「地」と「子」を意味する語彙がなくとも、「天」と「父」という語彙の中に、「地」と「子」が包含されています。なぜなら、「地」のない「天」はなく、「子」のない「父」はあり得ないからです。しかもこの「父」と「子」はひとつであることをイエシュアは宣言されたのです(ヨハネ 10:30)。

●なぜ、イエシュアは「神」を「父」と呼んだのか。そこには深い理由があります。

その呼びかけの秘密は、実は、ヘブル語の言葉の文字の中に隠されています。

ヘブル語の「父」(アーヴ、אב)は、「アーレフ」(א)と「ベート」(ב)の二つの文字が組み合わさってできています。「アーレフ・ベート」はヘブル語アルファベットの最初と次に来る文字であると同時に、「1」と「2」の数を表わします。「アーレフ」という文字は本来「牛」の意味で、それは「力」を表わします。あるいは、「すべての事柄の本源」とも言えます。



「アーレフ」は目には見えない本源の実体です。何らかの媒体がなければその存在を見ることのできない力ある実体であり、そのことが「ベート」の文字を必要としています。「ベート」の文字は「家」(בית)の頭文字を表わしますが、同時に、この文字は「子」を意味する「ベーン」(בן)、あるいは「息子」を意味する「バル」(בר)。

の頭文字です。「長子」も、ヘブル語では「ベホール」(בְּחֹר)です。つまり、本源である父「アーヴ」(אָב)は、「子」「息子」「長子」によって、また「家」において、はじめてその実体を現わされる方であると言えます。

●さらに興味深いことには、「ベート」の文字(ב)が前置詞(בְּ)で用いられると、「(はじめ)に」、「～によって」、「～と共に」というように、時やかかわりの方法や共働者を意味します。そしてそこにはゆるぎない「信頼」が存在しています。そしてこの「信頼」を意味する動詞が「バータハ」(בָּטַח)で、名詞は「ベタハ」(בְּטָח)です。なんとすべてにおいて、ベートの文字(ב)で始まっています。

●使徒ヨハネは、御子イエシュアのことを「ことば」(ロゴス)という概念で表わしました。そして「ことばは神と共にあった」と記しています(ヨハネ 1:1)。この「共に」という表現にはギリシア語の前置詞「プロス」(προς)が使われており、それは「互いに向かい合っている信頼の関係」を表わしています。そして、ヨハネ 1 章 18 節では、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされた」とも表現しています。だれも見たことのない神(父)の秘密を知っておられる御子が、人となって来られて(「ポー」בּוֹא)て、私たちの間(中)に住まれ(「ベーン」בֵּין)、御父のみこころを語り、そしてご計画を成し遂げられました。そのことを正しく知ることが聖書の教える「悟り」(「ビーナー」בִּינָה)です。

※ここまでに使われているヘブル語の頭文字がすべて(ב)であることに注目する必要があります。

## (2) 家を建てる「御父」と「御子」

### בְּרֵאשִׁית בְּרָא אֱלֹהִים

●旧約聖書の創世記の冒頭は上記にあるように、「ベレーシート・バーラー・エローヒーム」です。旧約聖書には「アルファベット詩篇」というすぐれた語法があるにもかかわらず、なぜ、聖書は「アーレフ」ではなく、「ベート」の文字から始まっているのでしょうか。それは決して偶然ではなく、奥義なのです。天と地の創造は、「アーレフ」(א)によって信任された「ベーン」(בְּנֵי)、すなわち、御子によってなされたからです。御子が天にある父の「家」(ベート בית)を地にまで広げられ、天地という「家」を創造されたのです。なぜなら、その家に私たちを招くためです。共に住むためです。天の父は御子にすべての権限を託して、天と地の創造をまかせました。ちなみに、「創造する」と訳された「バーラー」(בָּרָא)は、神にしか使われない動詞です。このことばも(ב)で始まる単語です。

#### ●コロサイ書 1 章 16～18 節【新改訳改訂第 3 版】

16 万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。

●興味深いことに、ヘブル語の「創造する」という動詞の「バーラー」(בָּרָא)が、息子である「バリ」(בָּר)によってなされたことを示しています。このように「御父」と「御子」とは互いを必要とし、永遠に信頼し合っているのです。御父は、御子によって世界を造りました。天と地における「万物」「見えるものも見えないもの」「天と地にあるすべて」、それらは御子によって存在している「ひとつの家」なのです。その家の中に、

## ヨハネの黙示録を味わう

神のみこころ、創造、墮罪、救い、福音、御国、統治、王座、栄光、シャーロームといった事柄のすべてがあるのです。回復のみわざも、創造のわざをゆだねられた御子によってなされます。

●「ベート」が意味する「家」という概念には、地上にある「神の家」「神の子孫」「主の幕屋」「主の宮」「神殿」「主にある私たちの体」「主の民」「イスラエル」のすべてが含まれ、それらは天にある「家」の写しと言えます。その「家」に住むことが救いであり、救われて神の子となった者はみな神の家における特権と祝福を味わうことが出来るのです。これらすべては、父が「アーヴ」(אָב)であることに秘められているのです。

●さて、話を「12」という数字に戻したいと思います。これまで説明してきたのは、「12」という数が、数量としての数ではなく、「アーレフ」と「ベート」の数の組み合わせであるということを理解してもらうためです。

「父」を意味する「アーヴ」(אָב)が、「アーレフ」と「ベート」の組み合わせからなっているように、「12」という数字も「1」(א)と「2」(ב)の組み合わせだと考えるならば、なぜ、神が「12」という数にこだわるのかが理解できるように思うのです。つまり、「12」という数字は、聖書においては「神の所有の民」を表わす象徴的な数であり、御父と御子(神と小羊)との永遠のかかわりの中にあるいのちの保障を表わす数字とも考えられるのです。もっとも、これは私のヘブル的視点からの独断的解釈です。

## 2. 新しい地における「諸国の民」とは

●聖なる都、新しいエルサレムは、どこもかしこも「12」で満ちた町です。門も、そこにいる御使いも、その門に記されている部族の名前も、土台石も、城壁の厚さも、門にある真珠も、そして都に流れるいのちの川の兩岸にあるいのちの木が実らせる実も、すべてが「12」でした。新しいエルサレムは、御父と御子が造られた家です(黙示録では御父と御子という言い方ではなくて、御座におられる方と小羊という言い方をします)が、その家に招かれ、そこに住む者とされた人々は幸いです。

●この「都」には「これを照らす太陽も月もない」とあります。というのは、かつての幕屋や神殿の至聖所がそうであったように、聖なる都、新しいエルサレムでは、神の栄光の光が都を照らし、小羊が都の明かりなのです(21:23)。

●ところで、新しい地においては、都の中に住む者と、そこに時たま入るけれども都の外に住む人々がいるようです。皆が皆、新しいエルサレムという都に住んでいるのではないようです。以下の聖書の箇所を読んでみましょう。

ヨハネの黙示録 21章 24節～22章 2節

21:24 諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。

21:25 都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

21:26 こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。

21:27 しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行う者は、決して都に入れない。小羊のいのちの書に名が書いて

ある者だけが、入ることができる。

22:1 御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、



## ヨハネの黙示録を味わう

22:2 都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、

その木の葉は諸国の民をいやした。



●ここに出て来る「諸国の民」とはいついだれのことでしょう。実は、この解釈は難しく、人によって解釈が分かれるところですが、ここは、

聖なる都、すなわち、新しいエルサレムに入ることのできた人々としたいと思います。新しい地においては、その中心は新しいエルサレムです。そこでは神と人とが共に住む中心地です。しかし、新しいエルサレムの門は常時開かれており、そこは出入り自由です。いのちの書に名が記されている人々は、自由にそこを出て、他の地で暮らすことは可能です。新しい地においては、人々は神から与えられた「都の光」(神の栄光の光)によって歩み、それぞれに与えられた能力を私たちの想像をはるかに越えた域で活かすことができますはずです。そしてそのような場を地上に求め、新たな文化を築くことができますはずです。ですから、永遠の御国では何もすることがなくて退屈ということはあり得ません。子どもが疲れを知らず、夢中になって遊んでいるように、永遠の御国の人々は、永遠の聖なる創造的な遊びに興じることができるのです。人間に与えられている創造する喜びを感じながら生きるのです。「あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」(詩篇 16:11)が実現する世界です。

●新しい地に住む者たちは、朽ちないからだを与えられているため、常に活動できる状態にあります。御使いと同様に眠る必要がないのです。新しい都の外では、おそらく太陽も月もあると考えられます。なぜなら、「都には夜がない」とあえて書かれているからです。もし、新しい都の外も太陽や月がなければ、そのように書き記される必要はありません。都の中には「夜」がないのです。「夜」がないとは、もはや眠る必要も休む必要もないという意味でもあります。諸国の民は、その「都の光」によって歩むとあります(21:24)。それは、例えて言えば、人は好きなことをしている時には時間を忘れるだけでなく、疲れも覚えません。むしろ快感物質であるドーパミンが常に働いて楽しいのです。ですから、都の外の地に広がった人々は諸国の民に栄光と誉れとを、中心地である新しいエルサレムに携えて来ることができるのです(黙示録 21:26)。

●十戒を記している出エジプト記 20 章 6 節にはこう記されています。

「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」と。「千代の恵み」とはどういうことでしょうか。「千代」と「千年」とは違います。「千年」は文字通りの「千年」です。しかし、「千代」とは世代の交代です。マタイの福音書 1 章にはアブラハムからイエシュアまで(省略されているものもあります)を 42 代(14×3)としています(ちなみに「14」は「ダビデ」の三つの文字(דָּבִיד)を数にして加算した数)。ではアダムからイエシュアまでは何代でしょう。ある計算によれば、76 代だそうです。しかもその間の年月は四千年です。四千年で 76 代です。とすれば、千代というのは途方もない年数になります。

●神の約束は「恵みを千代にまで施す」というものです。もし人が、実際に「千代」を経過する可能性がないとしたら、主はそのような約束はなさらなかったはずです。この主の約束は千年王国ではなく、永遠の御国におい

## ヨハネの黙示録を味わう

てはじめて実現されるのです。聖書が意味する「千代」とは時間的概念ではなく、時間を超越した永遠の概念と言えます。事実、「千代」と訳されたヘブル語は「千年」を意味する「エレフ」(עֶלֶף)の複数形「アラーフィーム」(עֶלְפִים)で、「幾千倍」とも訳せるのです。つまり数を表わす語彙でありながら、数量的な時間という概念を越えた世界を示唆しているのです。

●「エレフ」(עֶלֶף)は「アーレフ」(אֵלֶף)と同じ語源をもった語彙です。そもそも、ヘブル語の「アーレフ」(א)という文字それ自体が、すべての本源である「神」を表わしています。つまり「幾千倍」を意味する「アラーフィーム」(עֶלְפִים)は、「無限、永遠」と同義なのです。そうした世界で私たちは喜びと楽しみを味わうことができるのです。永遠の御国は決して退屈な世界ではなく、神から来る聖なる快感物質であるドーパミンの溢れている喜びの世界と言えます。その世界こそが、神と人とが共に住む永遠の家なのです。詩篇 90 篇の作者モーセは、「主よ。あなたは代々にわたって、私たちの住まいです。」と告白しています。そしてその住まいに「人の子らよ、帰れ。」と語る主のことばを記しています。この主の呼びかけの愛の深さを、感謝をもって、受け留める者とさせていただきたいと思います。

## 22章7節～21節

●キリストにある者に与えられている希望は祝福に満ちたものです。前回も、その前々回も「新しい天と新しい地」－「聖なる都」「新しいエルサレム」について学びました。それは、神と人とが永遠に住まうところの至聖所です。そこへ向かっていく最後のステージのメイン・ポイントは「**キリストの再臨**」です。そして、それは主を信じる者にとっての祝福された望みなのです。

●「キリストの再臨」はキリスト教信仰においてきわめて重要です。それゆえ、サタンは必死になってこの教えを混乱させ、また、脱線させようとしてきました。再臨信仰は救いの完成の信仰です。もしこの信仰が崩されれば、創造の信仰も、十字架と復活の信仰もすべてが宙に浮いてしまいます。したがって、キリストの再臨に対する正しい理解は是非とも必要です。

●内村鑑三はこう述べています。「十字架が聖書の心臓部であるなら、再臨はその脳髄であろう。再臨なしに十字架は意味をなさない。したがって、我々クリスチャンは再臨の信仰の立場に立って聖書を通観する必要がある」と。

●初代教会は、そうした意味ではまさに再臨の希望(=携拳待望)に満ち溢れる教会でした。彼らが世に勝ったのは、目に見えるものに心を奪われることなく、目に見えないものにこそ目を留めたからです。キリストの再臨によってもたらされるこの世の終わり、救いの究極的完成の時を最も確かな出来事として信じながら、困難な時代を生き抜いたのです。このことは現代に生きる私たちにとっても真理なのです。

●「終末の教え」の最終回は、ヨハネの黙示録にある、「わたしはすぐに来る」という主イエス・キリストの再臨の約束のフレーズを取り上げながら、緊張感を持って、主の再臨を待ち望むことの大切さに心に留めたいと願っています。

### 1. 「わたしは、すぐに来る」という再臨の約束のフレーズ

●ヨハネの黙示録には、「わたしは、すぐに来る」という表現が4回あります。

- (1)「わたしは、すぐに来る。」(黙示録 3:11)
- (2)「見よ。わたしはすぐに来る。」(黙示録 22:7, 12)
- (3)「しかり。わたしはすぐに来る。」(黙示録 22:20)

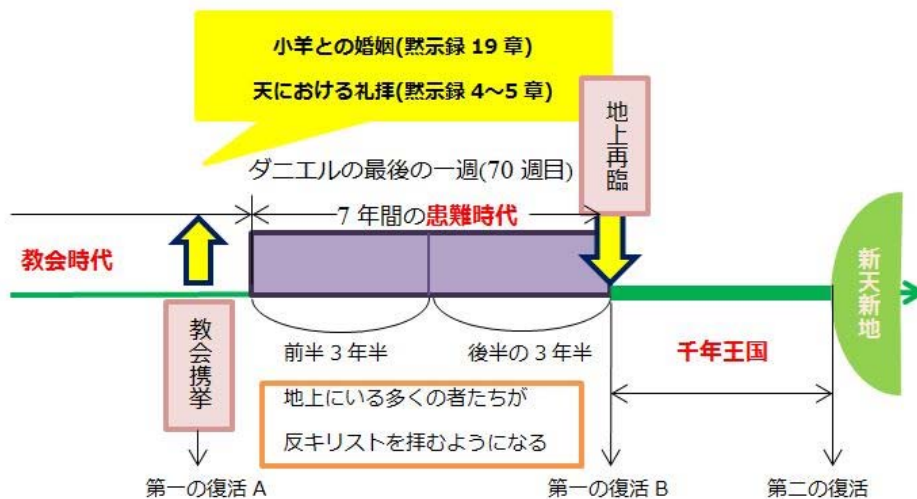
●「わたしはすぐに来る」という表現はヨハネの黙示録にしかありません。これと似た表現として、黙示録1章3節に「時が近づいている」という表現があります。使徒パウロはピリピに宛てた手紙の中で「主は近いのです」(ピリピ 4:5)という表現で主の再臨を示しています。「すぐに」、「近づいている」、「近い」も、みな時間的なニュアンスとして使われています。

●上記の箇所では表現が微妙に異なっていますが、いずれも共通しているのは、「**わたしは、すぐに来る**」(途中に句読点のない「わたしはすぐ来る」も原文は同じ)という部分です。「すぐに」とは、本来、予め定められた時に、遅れることなく来るという意味です。しかしながら、私たちはその定められた時を知らされておりません。したがって、常に備えて待っていなければなりません。主にあっては、千年は一日のようでもあるわけですから、二千年の歳月も「すぐに」と呼ぶことがあってもおかしくありません。しかし、人間にとって「千

年」が一日という感覚はありませんが、私たちが実際に永遠の御国に住むことになれば、そうした感覚が与えられるはずで

●重要なことは、「**わたしが来る**」という事実です。つまり、キリストが再び来られるという確かな事実です。前にも、キリストの再臨は二度あるということを知りました。そのひとつは「キリストの**空中再臨**」、そしてもうひとつは「キリストの**地上再臨**」です。私たちクリスチャンにとってきわめて重要なのは、前者の「空中再臨」です。後者の「地上再臨」の時期は、反キリストがエルサレムの神殿(おそらく第三神殿)において、自ら神宣言をしてから三年半後です。「反キリストが自ら神宣言」をしたときから、神が天と地を創造された時以来、いまだかつてなかったような苦難(大患難)が襲うことが預言されています。もし主がその日数を少なくしてくださらないなら、だれひとりとして救われる者はいないと言われるような大患難です。それは3年半の間及びます。

●大患難の目的は、反キリストをメシアと信じるユダヤ人に対して注がれる神の怒りであり、同時に、神の民イスラエルを再び神の民として再生するための試練の時です。そのような時に、神に選ばれた14万4千人のイスラエルの民はその額に神のしるしをつけられることによって守られます(黙示録7章)。その大患難の終わりに、「恵みと哀願の霊」が注がれて、イスラエルは民族的に悔い改め、イエシュアをメシアと信じ、「来てください」と「主の御名を呼び求める」ようになります。そこでキリストが地上再臨されるのです。そのときキリストは、すでに携挙されて天でハネムーンを過ごした花嫁と共に地上に来て、結婚披露宴がなされると同時に、世界中からイスラエルの民をエルサレムに集めて、イエシュアをメシアとする地上の王国、すなわち「千年王国」が実現します。



●キリストの地上再臨の時期は、キリストの空中再臨から、およそいつのことかおのずと分かりますが、「空中再臨」の場合には、それがいつであるのかはだれも分からず、しかも、知らされてはいないのです。ここに**不安定な緊張感**があります。必ず、来ることが約束されてはいても、その時がいつなのか分かりません。ですから、「目を覚ましている」必要があるのです。キリストの花嫁はこの不安定な緊張感に耐えなければなりません。しばしば、この不安定な緊張感に耐えることができずに、いついつの時、何年何月頃にキリストが再臨

するという預言をする者が現われたりします。しかし、再臨の時を確定するような預言は決して本当ではありません。それは偽りの預言です。なぜなら、イエシュアはそのときはだれも知らないと言っているからです。イエシュア自身も知らされていないのです。これを定めているのは御父のみです。今は、花嫁を迎えるための住まいを花婿は整えています。花嫁を迎えるためのゴー・サインを出すのは御父なのです。ですから、御父にしかその時は分かりません。したがって、花嫁である私たちは花婿なるキリストが再び迎えに来られるのを、目を覚ましてじっと待っていなければならないのです。当然のことながら、そこには不安定な緊張があり、ある種の忍耐が求められます。そのような緊張と忍耐をもって主の来臨を待ち望んでいた人々は意外と少ないことに気づかされます。聖書におけるそのような模範的な人物、また、模範的な教会を紹介したいと思います。

## 2. 不安定な緊張をもって、主の来臨を待ち望む信仰

### (1) 老シメオンと老アンナ

●キリストの初臨のときにも、「イスラエルが慰められる時」を信じて、ひたすらメシアの到来を待ち望んでいた者として、ルカは「老シメオン」と「老女預言者アンナ」の二人を紹介しています。彼らは神の約束をひたすら信じて、いわば忍耐と緊張をもって人生を生き抜いて来た者でした。二人とも老人であったところに、真の信仰を見せられます。なんと「アンナ」は84歳であったことが記述されています。信仰を持つとは、漠然としたことではなく、主の来臨を信じながら、忍耐をもって生き続けることと言えます。その意味では、シメオンもアンナもすばらしい信仰の模範者だったと言えます。

●シメオンは幼子イエシュアを腕に抱いたとき、神をほめたたえながら、「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの救いを見たからです。」と言っています。シメオンの生涯がいかなるものであったかをきわめて簡潔に記している表現です。「ちょうどこのとき、彼女もそこにいて」として、アンナのことが紹介されているのです。

### (2) フィラデルフィアの教会

●黙示録2～3章に記されているアジアの七つの教会の中で、唯一、主から非難されていない教会です。そのフィラデルフィア教会に対して、主は次のように書き送っています。

【新改訳改訂第3版】黙示録3章10～13節

10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に來ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。

11 わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。

12 勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。

13 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。



## ヨハネの黙示録を味わう

●「わたしの忍耐について言ったことばを守った」とはどういう意味でしょうか。この手紙が書かれたのは、キリストが復活・昇天してから少なくとも60年から70年が経過しています。ここで「わたしの忍耐について言ったことば」とは、キリストが再び来られるという再臨の教えを守ったことを意味しています。フィラデルフィアの教会は、主の再臨を信じて、緊張感を持って待ち望んでいた模範的な教会だからです。

●「わたしは、すぐに来る」、原文は「エルコマイ タクー」、「エルコマイ」(ἔρχομαι)は「わたしは来る」、「タクユス」(ταχύς)は「すぐに、速やかに」という意味。しかしここでの「すぐに」ということばは、私たちが考える「早急に」という意味ではなく、むしろ、「突然に」「予期しない時に」「思いがけない時に」という意味に理解する必要があります。というのは、イエシュア自身がその教えの中で、しばしば、予告なしに突然、主人が帰ってくる話をされているからです。

●たとえば、ルカの12章35～40節の箇所がそうです。その箇所を読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書12章35～40節

35 腰に帯を締め、あかりをともしいなさい。

36 主人が婚礼から帰って来て戸をたたいたら、すぐに戸をあけようと、その帰りを待ち受けている人たちのようでありなさい。

37 帰って来た主人に、目をさましているところを見られるしもべたちは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。主人のほうで帯を締め、そのしもべたちを食卓に着かせ、そばにいて給仕をしてくれます。

38 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、いつでもそのようであることを見られるなら、そのしもべたちは幸いです。

39 このことを知っておきなさい。もしも家の主人が、どろぼうの来る時間を知っていたなら、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。

40 あなたがたも用心していなさい。人の子は、思いがけない時に来るのですから。」

●マタイの福音書24章にも同じような話があります。ポイントはルカと同じで、「人の子は、思いがけない時に来る」ということです。それゆえ、「目を覚まして」「用心して」いることが教えられています。つまり、緊張感をもって待っていることを意味しているのです。これはとても不安定な緊張感を強いられる待ち方です。

●不安定な緊張とは、キリストが再び来られるが、それがいつであるか分からないという緊張です。気持ちを張りつめているためには忍耐が要ります。この緊張感に耐えられずに、キリストはあと何年、何月何日に来られると予告すれば、人は感心を持って耳を傾けてくれます。面白く感じる人も多くいて、大いに盛り上がります。しかしこれは主が教えた正しい待ち方ではありません。本当の待ち方は、主人がいつ帰ってくるか分からないところにあります。聖書では、「真夜中」「夜明け頃」と相場は決まっているのですが、常識的には、一番、目を覚ましていられない時間帯です。

●ひとたび、キリストが空中再臨されたならば、あとは一気に事が運んでいきます。だれも動き出した神のタイムスケジュールを止めることはできません。反キリストが登場し、七年間の患難時代を通過して、その患難の頂点に達した頃に、イスラエルの民が悔い改め、その後でキリストが地上再臨します。そして千年王国が実現します。その千年が過ぎると、今度は、新しい天と新しい地が造られ、聖なる都、新しいエルサレムが天から降りて来て、そこに私たちは永遠に住むこととなります。キリストの空中再臨がいつかは分からないのですが、その時

がひとたび訪れたならば、目を覚ましている必要もなく、事は明確な神のタイムスケジュールの中でどんどん進んでいくのです。

●最も不安定、かつ最も緊張感を強いられるのは、キリストの空中再臨までのことです。キリストは再びいつ来てもおかしくありません。

### 3. 目を覚まして待っていることへの報い

●もう一度、黙示録3章のフィラデルフィアの教会に目を向けましょう。

3:10 「あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。」とあります。

ここには、主の再臨の教え(それは緊張と忍耐をもたらします)を守ったことによる主の約束があります。それは、「地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう」ということです。「全世界に来ようとしている試練の時」とは、反キリストによる患難時代のことを意味します。それは全世界におよぶことになる未曾有の苦難です。その「試練の時には、あなたを守ろう」という約束です。

●ちなみに、キリストの空中再臨による携挙については、今日、三つの立場(見解)があります。どの立場でも「携挙」それ自体は認めているのですが、その時期についての見解が分かれています。

- (1) 前患難説・患難期が始まる直前に携挙が起こる。
- (2) 中患難説・患難期の中間(後半の大患難時代の前)で携挙が起こる。
- (3) 後患難説・携挙と再臨が大患難期の後にほとんど同時に起こる。

●この10節にある「試練の時」という部分を、「試練の時から」救い出すという意味に解釈する立場と、「試練の中から」救い出すという意味に解釈する立場に分かれます。前者の解釈では、教会は患難の時の前に教会が携挙されることとなります。しかし後者の解釈では、教会は患難の時の途中、あるいは、患難の終り頃に携挙されることとなります。いくつかの理由で、私は三つの見解の中で、(1)の「前患難説」に立っています。



●その理由としては、

#### (1) 「全世界に来ようとしている苦難」とは「ヤコブの苦難」だからです。

「ヤコブの苦難」とは神の選びの民であるイスラエルに対する神の怒り(小羊の怒り)です。それは、再び彼らを神のものとするための試練なのです。キリストの花嫁に対する神の怒りはすでに十字架の上にあります。従って、キリストの花嫁に苦しみを与える理由がありません。確かに、主にある者も「世にあっては患難があります」(ヨハネ 16:33)。しかし、ここで問題となっているのはそのような一般的な患難とは異なり、これまでにない未曾有の神のさばきとしての大患難のことであり、その目的も神の選びの民に対する最後のあわれみの時としての精錬的な試練なのです。そうした精錬的試練に神の子どもたちが遭う必要性はないからです。むしろ、主の携挙があることを信じて、緊迫感を持って、いつも目を覚ましていることが求められているからです。

#### (2) イエシュアの教えの中に、携挙があることを促すことばがあるからです。

## ヨハネの黙示録を味わう

例:ルカ 21 章 36 節「あなたがたは、やがて起ころうとしているこれらのすべてのことからのがれ、  
人の子の前に立つことができるように、いつも油断せずに祈っていなさい。」

### (3) 使徒パウロの教えの中に携拳の教えがあるからです。

例: I テサロニケ 5 章 2~6 節、9 節

2 主の日(患難の時)が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。

3 人々が「平和だ。安全だ」と言っているそのようなときに、突如として滅び(反キリストによる大患難)  
が彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決して  
できません。

4 しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみ(大患難)の中にはいないのですから、その日が、盗人のように  
あなたがたを襲うことはありません。

5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。

6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。・・・

9 神は、私たちが御怒り(大患難の出来事)に会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストに  
あつて救い(携拳)を得るようにお定めになったからです。

### (4) 携拳はユダヤの婚礼の慣例と合致するからです。

①結婚のための資金は花婿の父親が出すということです。新郎の父親が新郎のために、花嫁の父親にそれ相当の結納金を渡すのです。花嫁の白いウェディング・ドレスの費用は父親の責任です。このように、父親は息子の結婚において、幼い時から許嫁を選ぶだけでなく、やがての結婚に備えて、婚約式の時にその資金を支払うのです。そのあとで、息子の新郎は結婚後の新居の準備を父親の管理の下ですることになります。つまり、父親のOKが出ないうちは、花婿は自分勝手に花嫁を迎えに行くことができないのです。したがって、結婚の日がいつかということは、花婿にも分からないというわけです。

②父親のゴー・サインが出てから花婿は花嫁を迎えに行きます。花嫁も新郎がいつ来ても良いようにすでにウェディング・ドレスを着ながら待っています。花嫁はその結婚を祝う仲間たちの音を聞くと、素早くベールをまとい、花婿に会うために通りへと案内されます。花婿と花嫁は道路の途中で出会います。そこが結婚式の場です。

③ユダヤでは「フッパー」という、一枚の幕に四つの支柱をつけたものの下で結婚式がなされます。そして、結婚式の後に、二人は、花婿が準備した新居で七日間のハネムーンを過ごします。

④一週間のハネムーンでは、だれひとり彼らのところに入入りすることができないのです。結婚の祝宴は一週間のハネムーンが終わってからということになります。



ユダヤ人の伝統的な婚礼儀式のウェディングキャノピー chuppahまたはhuppah

## 最後に

●もう一度、主の約束のことばを聞きましょう。同時に、それに伴う、勧めを心に留めましょう。

### (1) 黙示録 3 章 11~12 節

## ヨハネの黙示録を味わう

「わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われぬように、あなたの持っているものをしっかりと持っていてください。勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。」

### (2) 黙示録 22 章 7 節

「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」

### (3) 黙示録 22 章 12 節

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」

### (4) 黙示録 22 章 20 節

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」

(花嫁) 「アーメン。主イエスよ。来てください。」 = マラナ・タ

● 私たちにとって、キリストの空中再臨に伴う携挙は「祝福された唯一の望み」です。信仰を持つことは、不安定な緊張感をもって、忍耐をもって、主を待ち望むことです。そして、この信仰には大きな報いが伴います。花嫁が花婿を迎えるように、いつ、携挙があってもいいようにしていることが、私たちにとっての重要な課題なのです。



# 完